その他

渡部律子名誉教授オーラルヒストリー

―ソーシャルワーク研究と教育の道のり：1950～1980 年代・子ども時代から修士課程まで―[1]

岩永　理恵，渡部　律子，太田　聡子，辻村　あずさ

The Oral History of Professor Emeritus Ritsuko Watanabe Becoming a Researcher and University Professor:

1950s-1980s，From Childhood to Master Course Education

Rie IWANAGA，Ritsuko WATANABE，Tomiko OTA，Azusa TSUJIMURA

要約：ソーシャルワークの実践者であると同時にスーパーバイザーであり，また日米両国で長年，専門教育を行った渡部律子先生に，研究と実践のあゆみを伺ったオーラルヒストリーの第 1 回報告である．

前半（1953～1976 年）では，幼少期と学生時代，社会福祉への関心，関西学院大学での生活と学びを当時の時代背景や大阪下町の地域性，家庭状況等を詳しく交えて語られた．後半は，関西学院大学院での修士課程と米留学準備（1976～1982 年），ミシガン大学留学後の苦労と充実の日々（1982～1984 年）である．父を亡くし，学費のため掛け持った相談業務で，専門性獲得の要を痛感し，様々な学習機会へ参加したことが，米留学をも決意させた．英語力と奨学金を獲得して，留学を果たしたが，英語授業が大変で毎日泣いていた．同時に，自分の苦境を語って助けを求めることも学んだ．修士課程は大変であったが，当時の先端理論を理解するのが楽しかった，と語る．

キーワード：オーラルヒストリー，ソーシャルワーク研究，関西学院大学社会福祉学科

■はじめに

渡部先生には多数の著作があり，先生の研究や実践への考えを知りたい場合，それらから学べばよい．他方で，経験的に，通常の研究関連の著作には一定の型があって，書きづらいことがあるように思う．そういう類に属していて，実は重要かつ貴重な所感を知ることができるのは，口頭でのコミュニケーションを通じてである．

幸運にもこのような場に接したとき，なんだか得したなと思うと同時に，もっといろんな方に知ってもらいたい，と感じることがある．渡部先生と同僚という立場で一緒に仕事するなかでうかがったことがらが，まさにそれであった．そこで，先生の話を，オーラルヒストリーという形で，記録に残せないかと考えた．

以下は，最終講演という形で 2021 年度末に開催したオンラインの会合で披露された内容をもとに，あらためて渡部先生が話された記録である．

岩永が，渡部先生と先生に学恩のある日本女子大学の院生・卒業生に声をかけ，賛同していただき，企画を進めた．聴き取りの記録は，渡部先生と，阿川千尋氏，太田聡子氏，大輪礼氏，辻村あずさ氏の成果である．

聴き取りは，渡部先生の子ども時代からはじめ，学生時代，留学の経緯，アメリカでの留学と教員生活，日本帰国後，関西学院大学と日本女子大学で経験されたこと，その間，たくさんの研修に携わられ本や論文を執筆され，社会福祉教育，ソーシャルワーカーの養成，ソーシャルワーク研究，について先生が経験されてきたこと，今の時点で振り返ってみた上でのお考えをうかがうことにしている．今回は，その第1・2回の記録である．

ぜひ，このあとの記録を読み進めていただき，意義は，読者のみなさまそれぞれに判断いただきたいが，いちおう，私の研究上の観点から，オーラルヒストリーの意義を二点述べておく．

一つ目は，特に，渡部先生が留学し，帰国され，その後に経験されたことは，日本の社会福祉の歴史の一部であり，個人の経験を通じて社会福祉の歴史を照らしなおすことができると考える．ひとり一人の人生のなかに社会が刻印される部分がある．たとえば，先生がソーシャルワークを学ぶ上で，アメリカを選択されたのはなぜなのか．もちろん，個人の決断があるが，そこに導く社会的要因もかいま見られる．

二つ目は，戦後の社会福祉学では，「技術論」と「政策論」という二通りの立場があるという歴史と関係する．社会福祉学機関誌の第1号特集は，「『諸科学』の中ではとりわけ政策論の基礎である社会科学的側面と，技術論の基礎である心理学的側面が重視され，その『統合』を模索するものであった」という．現在までにこの「統合」がなされたのか，学会においては未決の問題のように思われる．

他方で，この区分で考えると，渡部先生は「技術論」私は「政策論」で，たしかに研究のバックグラウンドは異なる．しかし，社会福祉について決定的に異なる立場をとっているとは思えない．共通する立場があるとして，どのようなものか，もう一歩進めて考えるアイデアを，先生とのこれまでの交流で随所にいただいた気がするのだが，まだ生かし切れておらず，そのようなことを考えるヒントになるのではないか，ということを記録の意義として書き残すに留まる．

2021年10月24日実施：第1回インタビュー
話し手：渡部律子先生，聞き手：岩永，阿川，太田，大輪

ではこれから皆さんにお話をし，質問もいただきながら進めていきたいと思います．

まず，第一回目にお話しするのは，私の生い立ちです．やはり自分がどんな風な人生を歩んできたかということが，自分の職業選択やその選択した職業で何を大切にして行きたいと考えているかに影響を与えていると考えるからです．

【戦後，時代背景，地域性】

私が生まれたのは1953年です．日本は「もはや戦後ではない」というキャッチフレーズが作られました．日本という国が戦争を乗り越えて復興していこうとしている時期でした．そうは言うものの私の近所には，まだまだ戦争の傷跡が垣間見えるような情景が広がっていました．それぞれの家庭も決して豊かな生活をしていませんでした．お祭りなどに行くと，傷痍軍人と言われる白い服を着た人がアコーディオンを弾いていました．もう私が小学生の時ですから，1960年に入りかけていたのですが，その時にもこのような情景がありました．子供心に戦争というものがあったということ，そしてこういう生活をしなければいけない人達がいることを知りました．

生まれた場所は，大阪の下町です．道頓堀とい

うところです．よくテレビで出てくる道頓堀川のグリコの看板のところまで子供の足でもおそらく10分ぐらいの距離でした．家の周りも商売をしている人や様々な職業の人がいて，その人たちの人生を子供ながらにも見聞きする機会をたくさん持ちました．隣の家の話し声が聞こえるような住環境で，喧嘩する声なども聞こえました．しかし，今振り返ってみて非常に興味深いことは，お互いがそれぞれの家族の抱える事情を知っていながらも，大きな声では言わないという暗黙の了解があったと思います．先ほどお話ししたように，さまざまな事情を抱えて生きている人たちがいた，ということです．不思議なことに，子供心にも，「人には色々な事情があって，なんでもかんでも公にしてはいけない」ことを学んだ気がします．不思議なもので，5歳や6歳でも何となくそんな雰囲気は感じとります．ここで私の人間観ができ始めたかな，と感じています．幼い頃から，「どうして苦しい思いをする人がいるのだろう」とか，「いわゆる普通の家族形態ではなければみんなで，大きな声では言わないけれど，コソコソってそのことを言われなければいけないんだろう」「生まれた家，家族のせいで不幸になる人がいるのはおかしくない？」と不思議に思っていました．

【子供時代の大手術，運動が苦手になる】

5歳のころ，大きな手術を経験しました．斜頸という診断で，首が曲がったままでした．当時，大阪大学病院で手術をし，上半身ギブスで固定されました．左の首の胸鎖乳突筋という，頭を支えるのに必要な大きな筋肉をほとんど切除されています．そのせいでやっぱり体を動かしたりするのがなかなか難しく，家で過ごすことが多くなりました．「家の中に居るのが好きだ」いう感じで，あんまり外遊びしないようになりました．きっと体を使いづらく，楽なことをしていたのだと思います．外遊びできないのを補ってくれたのは，本を読むことでした．うちにいて本を読むのがとても楽しくて，一人でよくいろんなことを想像し，「こうなったらどうなのかな，ああしたらどうなのかな」などと考えていました．

少し，ソーシャルワークとの関連性を話したいのですが，ソーシャルワークのトレーニングの際に「想像力が大切です」と強調されるのですが，私の場合は体が弱くって本をたくさん読み，そのころから色々な事象に関する想像をしていたことが役に立っている気がします．また，子供のころから本や周囲の人々の観察を通して様々な人生を垣間見させてもらったと思います．ソーシャルワークで「秘密保持の原則」っていうのがあるのですが，この原則も，幼い頃からいつの間にか身に沁み込んでいた気がします．人には秘密にしておきたいこともあるだろうと感覚的に学びました．つらい経験も，話すことで気持ちが良くなる人もいれば，自分の中にしまっておきたい人もいるっていうのが分かりました．

【公立の小学校から高校まで：多様性を学ぶ】

小学校から高校までずっと公立学校に通いました．中学校は心斎橋という，繁華街が通学路でした．同級生の9割が商売人のお子さんです．私の実家もずっと商売をしてきており，同級生は，私と似たような人も多く，良い表現をすれば物知りである，マイナス表現をすれば変に大人びていました．早くから大人の世界を見ていたという点は私とも共通しています．土地柄，在日中国人の同級生も結構いました．中学2年生の時に指の腱を切り移植をすることになり，2か月以上学校を休むことになりました．それまでどちらかといえば優等生だったのですが，長期の欠席で成績が下がり，先生方が私を見る目が変わったという経験もしました．

高校受験の直前に住所変更してしまったため，

高校は同級生たちと異なる学区にある，田舎に立地している学校に行きます．私は同級生と同じ学区の高校に行こうと楽しみにしていたのですが，それが叶わなかった背景には，私の母親の教育に対する姿勢があります．それは，学校教育にさほど関心がないということです．教育熱心な親なら高校受験前に住所変更することの意味がわかると思うのですが，そうではありませんでした．高校受験のちょっと前に担任の先生に呼ばれて，「ここの学校は受けられません．学区が違うから」と言われ，急遽なじみのない学区の高校を選択することになりました．後から考えると，知っている人が誰もいない学校に行ったことは良い経験になりました．

高校の近所には田んぼ，ため池などがあり，同和教育にも力を入れている学校でした．在日韓国人の同級生も少なくありませんでした．民族運動の影響もあり，学年の途中から日本姓から自国姓に変更する友人がいた一方で，それを選ばない友人もいました．先ほど言ったように，人が何を選択したいのかはその人によって異なることを学びました．先ほど私は自分の生い立ちの中で，「どうしてこういう風な家に生まれたら，こんな生き方をすることに決まってしまうのか」，疑問を持ったと言いました．成長するに従って，その疑問が大きくなりました．高校時代は特にそうでした．当時はまだまだ差別がひどく，就職，結婚などに，大きな影響を与えていました．「青い」って言われれば青いのですが，変な正義感に燃えていたのかもしれません．

あと，職業選択に影響を与えた経験もしています．私は，今のように自分からしゃべる人間ではなく，人の話を聴くことの方が得意でした．そうすると不思議なことに，みんながそれをポジティブなものとして受け入れてくれたのです．いつの間にか，「話を聞いて」と言われるようになり，「おかげで気分がすっきりした」などと評価されることも出てきました．

正義感や，そのような友人からのフィードバックもあり，進路を考えるとき私の中にあったのは，福祉職もしくは料理人でした．料理人は実家の影響と食べるのが好きだったからです．実家は，飲食関係でした．お客さんがおいしいものを食べて喜んでいらっしゃるのを見て料理人という考えが浮かびました．自分が世の中で何の役にも立たないかもと感じてしまう年齢の時に，人の話を聞いたり，料理を作ったりして，喜んでもらえて嬉しかったのだと思います．だから，食べることに関わる仕事か福祉にかかわりたいなと思っていました．

【福祉系大学進学】

受験では，福祉の大学をいくつか受けるのですが，その中で一校しか受かりませんでした．一番の希望は大阪市立大学の社会福祉学科でしたが，私は理系に弱かったので，関西学院大学合格が決まったとき，公立受験は諦めました．ここで初めて私立の学校に入りました．ミッション系の大学でキリスト教に触れることになります．クリスチャンの持つ価値観と福祉の価値観は，とても近いなと今でも思いますね．「奉仕のための鍛錬」というのがミッションでした．そこで学んだことは役に立っていると感じます．

大学では，人生に関して本当に迷い悩み，あまり真面目ではない学生でした．大学に行って与えられた自由を上手く自分の成長のために使うことができなくて，自分がどうしていったらいいのだろうって悶々としながら，ついつい授業をさぼって遊びに行ったりもしていました．

しかし，そんなことを悔い改めないといけない時が来ました．大学２年の時に父が亡くなりました．全く予期していない事故死です．学費のこと，将来のこと，真剣に悩みました．社会福祉を専攻して，私は本当に生活していけるのだろうかと考

え，この時突拍子もない決断をするんです．「まずは，手に職をつけなければ」と，「犬の美容師になる」と決めました．私の一番上の姉は，私と7歳年齢が離れていて，父が亡くなったとき，美容師の仕事をしていたんですね．その姉が「これからは犬の美容師の需要が高まるはずだ．グルーミングスクールに行くなら授業料を出してあげる．一緒に美容の仕事で生活しよう．」と言ってくれたのです．グルーミングスクールは美容学校よりも短期養成で時間もお金もより少なくてすみました．それでダブルスクールを始めました．全く異なる世界でとても面白かったのですが，適性の無さに気づかされました．子供の頃に胸鎖乳突筋をとっていたのと，また，14歳の時に指の腱を切るという大きな怪我をして手の動きも悪いこともあり，うまく体が使えない，つまり器用じゃないんですね．それに気付いて「これは私に向いた仕事ではない．ごめんなさい．」と謝り，大学に戻りました．体のせいにしていますが，適性がなかったと思いました．

私が大学4年生（1974年）当時，社会福祉士資格はありませんでした．福祉を専攻する学生を実習に出す大学も多くはなかったのですが，関学では，実習の中心となってくれていた武田健先生がアメリカで留学し博士号を取っていたので，ソーシャルワークで実習に行くのは当たり前という考えだったようで，先生の個人的な関係を使って実習先を見つけてくださっていました．多分20人ぐらいが実習に行ったと思います．病院や子どもの施設等がありましたが，私は，自閉症や心理的問題を抱える子どもの施設希望でした．当時「情緒障がい児学級」と呼ばれる学校併設の施設に毎週一回，一年間通いました．ここでも，壁にぶつかります．自分が勉強していなかったことが本当は良くないのですが，自分にできることは何か，実際何か役に立つようなことができているのか，ということを考えていました．実習前には，有名なブルーノ・ベッテルハイムという臨床家が自閉症の子どもの治療にあたって，子どもが大きく変化するプロセスを書いた本などを読んでいました．しかし，一年間，何のスキルもない実習生が関わっても変化するはずないですよね．この時の無力感は「子どもの障がいの正しい理解がなかったこと，実践家にできることは何かをしっかりと考えられていなかったこと」などのせい，と後に理解します．この経験は，アメリカの大学院で院生が実習に無力感を感じて相談に来た時に，その問題を解きほぐすのに役立ってくれました．クライエントとその家族がおかれている状況をしっかりとアセスメントし，今何が必要か，何を今の自分の力で提供できるのか，を考えることが必要だと振り返って思います

就職時期が来ると，まずは社会福祉領域で仕事したいと思って福祉職公務員をいくつか受けたのですが，当時就職氷河期でもちろん，私は受けたところ全てで不合格でした．オイルショックの直後で，公務員はすごい人気でした．何も資格も持たない私たちが福祉の仕事をするには，どうすればよいか，と考え，同じゼミ生数人で，保育士の試験を受けました．当時，保育士は高校卒が受験資格要件でした．ピアノなんか全くできなかったんですが，知り合いのピアノの先生に「上手にならなくてよいのです．バイエル100番ぐらいまで弾けるようになれば」と頼み，最低限のことを教えていただきました．でも，結局大学院進学を目指します．関学では大学院でもずっと実習に行かないといけないことになっていて，そこで本格的に勉強させてもらえるのです．もっと実習に行ってちゃんと勉強しなきゃいけないっていうことがわかっていたので，大学院を受けました．3人受けたんですが，他の残りの2人はとっても成績がいい．私は本当に成績も良くなくて，大学院の面接試験時に，面接官に，「あなた，専門の成績悪いね」と言われました．本当のことなので，何も

言えません．そんな時，恩師というのはありがたいもので，私の指導教官が「この人は，成績は悪いけれど，根性だけはあるので4年かかっても卒業はします」と口添えしてくださいました．あと，受験の際，専門科目や英語は成績が特段良くはなかったのですが，第2外国語のフランス語の成績が割と良くてそれが幸いしました．大学時代英語の成績が悪かったので，せめて何か外国語を習得したいと考え，日仏学院に通っていたのです．夜間に授業がありました．今思い返せば，大学時代あまり授業は出ていなかったけれど，好きなことは真面目にやっていたようです．

【質疑応答】

対話者A：ご兄弟がいらっしゃったと思いますが，そこに関心があります．3人姉妹だったと記憶していますが．

渡部：大事なことを抜かしていました．1953年に，3人姉妹の3番目で生まれています．一番上の姉（長女）とは7歳違い，すぐ上の姉（次女）とは4歳違いです．

両親は仕事で忙しかったので，夜は姉妹だけで過ごしていました．食事は作ってくれましたが，それを3人で食べて，自由に姉妹で過ごす生活です．その後の生活では，お店の人が家に住み込みでいるときもあったし，自宅と店が一緒のこともありました．私がうんと小さいころ，温泉地で一時旅館してたこともあったんですけど，そこに居る時には，姉たちが学校に行っている間，お店の従業員の人たちの中で遊んでいました．みんなは私が子どもだから何もわからないと思い遠慮なく，両親の悪口や大人の話もするんですね．そういう中で，子ども心に，「お父ちゃんもお母ちゃんも，大変やな」とか，「大人の人って色々難しいことある」というのを薄ぼんやり理解していました．

あんまり親と一緒にいないし，親としての両親よりも「仕事をする人」として接することが多かったように思います．その部分は尊敬してました．すごいなって思ってました．後々も，お客さんやお店の人たちからいろいろ言われてもとにかく商売を続けている，「偉いな」と思いました．

対話者A：あんまり教育に関心がないって話があったんですけども．お生まれの時代を考えると（1953年），進学する女性はほとんど短大に行く時代だったと思うんですね．そういう意味でも四年制大学に行こうっていうのは，どうしてでしょうか？

渡部：確かに，私の高校でも「家庭科クラス」というのがまだあり，授業科目に調理や裁縫といった家庭科系のものが多く，そのクラスの人は四大進学しませんでしたし，短期大学進学者も少なくありませんでした．しかし，私は三女だったこともあり，姉たちが様々な新しいことを開拓してくれた道を通ることができた，と感じています．一番上の姉は美容学校に行き，いわゆる手に職をつける，という道を通ったのですが，すぐ上の姉はとてもしっかりした人で，何故か四年制大学を目指していました．しかし，大学合格しなければ税理士の専門学校に行き，家業を手伝う約束だったようです．

両親は子どもの教育に関心が無かったといいましたが，余裕がなかったというほうが適切かもしれません．すぐ上の姉が大学受験した日も，姉がいないことで朝初めて気が付いたようでした．すぐ上の姉は4年間家業の手伝いをしながら大学に通いました．専攻は社会心理学でしたが，大学4年生の時に児童相談所で子どもの遊戯療法のアルバイトをしていました．それが私の進路には大きく影響していると実感します．

対話者A：社会福祉学部を選んだのは何故でしょう？

渡部：質問を受けて振り返ってみても，実際よく自分でもわからないんですね．姉は心理学だった

ので，姉と同じ道をたどるなら心理学なのに，なぜか，「社会福祉」と私は思っていました．大学の学部に社会福祉があればそこを受け，なければ「社会福祉学科」を受けていました．何の影響だったのでしょうね．福祉というのは・・・

対話者 A：当時社会福祉がある意味，社会で脚光を浴び出していたのでしょうか．

渡部：私はテレビで社会福祉の仕事についている人を見てあこがれたわけでもなかったのですが，姉がアルバイトをしていた関係で「児童相談所」という機関にはなじみができていました．姉のアルバイト仲間であった他の大学の学生たちが家に遊びに来たりもしていました．大学院生の人もいて「すごいなー．カッコ良いな」と高校時代に思っていました．

対話者 A：当時は今のような予備校がなかったので，受験雑誌か何かで社会福祉を知られたのでしょうかね．

渡部：受験問題集なんかはでていたので，そこにはあったと思います．

対話者 C：大阪なら府立の社会福祉短期大学がありましたが，そこの受験は考慮されなかったのですか？

渡部：私たちが略して「社事短」と呼んでいた大学ですね．そこも候補でしたが，なぜか私の中では，四年制の大阪市立大学を選択していました．総合大学であることを何となく望んでいたのかもしれません．

対話者 B：社会福祉公務員を受けて不合格だった時，民間への就職は考えたのですか？例えば病院のワーカーとか．

渡部：先ほども少し話しましたが，すごい就職難で，また当時ソーシャルワーカーを雇ってくれる民間の病院なども限られていました．もちろん，友人で優秀な人は病院のワーカーなどにもなっていきましたが，正規採用ではなかったかもしれません．当時，私が所属していたゼミの同級生が複数名ある精神病院のワーカー職を受けて，面接試験でお給料のことを聞かれた時，当時そうでなくても男性有利だったのに，男子学生の一人が「社会福祉職ですから安くてもかまいません」といった発言をして，一緒に受験した女子学生に後に説教されていました．残念ながらこの男子学生が合格しています．

対話者 A：（渡部先生の）うちも商売をやってたりして，そういう環境ってすごく進路選択に関係するんだなと思ったんですけど，やっぱりもっとも影響したのは，渡部先生自身の考え方なんですかね？

渡部：そうですね．大人の世界を早くから見ていて，人間の福利に関心を持ったということでしょうかね．例えば，サラリーマンのおうちには，他人が一緒に暮らしたり，入って来たりしませんよね．でもビジネス旅館のような旅館業を含めて商売をしている家庭だったので，（自分の）成長過程で，世の中にはいろいろな職業があって，人生があってというのを見ることができた．そこからやはり「出自によって，生まれた環境によって将来が左右されるのはフェアじゃない．」という気持ちがすごく大きくなったのだと思います．私が子どもの頃は，戦後であっても，まだ日本は国全体としては貧しくて，私の家で働いてくれていたお姉さんやお兄さんたちは，貧しい家の出身の方が多かったんです．お仕事があまりなかったんですよ．だから，中学を卒業し，住み込みでご飯を食べさせてくれて給料がもらえれば，給料は高くなくてもよいからそこで働く，という時代だったと思います．その方たちの，生い立ちも何となく小耳に挟む機会がいっぱいあったので，さらに「世の中不公平！これは変わってほしい」というような思いが募っていたのだと思います．

対話者 D：ご家族の事を伺いたいんですけれども，いくつか共通するところもあるかもしれないので，まとめてお話しいただければと思います．

小学校を卒業されてから，苦労して育ってきたお父様と，それから農家のご出身で女学校まで行ったけれども，まあ子供たちの教育にはそんなに熱心ではなかったというお母様．お父様とお母様の関係ってどうだったのかなっていうこと．それから，お父様と姉妹３人との関係はどんなだったかなって．お父様ってお子さんたちにとってどんな方だったのかなっていうところ，お聞きしたいなと思います．

渡部：父親は明治生まれの学歴の低い人，母親は農家の出身．戦争時代を経て，おそらく生活すること，子供たちを食べさせることで精一杯だったのかもしれない，と思います．子供に愛情をかけるとか，教育のために何かをするとか，そんなことには考えが向く暇はなかったのだと思います．私，向田邦子さんのエッセイ読んでよく理解できるんです．生きることに精一杯だった世代の人たち．自分たちの親からは親のモデル像が学べなかった人たちなんだろうなって思います．父親は，子どもの時，仕事の合間に海岸に行って砂浜に数字書いて，算数していた，という話をしてくれました．両親ともね，すごく成功した商売人ではなかったけれども仕事に関しては，頑張っていました．接客態度などは立派でした．

でも父親は，本当は親としてもっと違う形で子どもたちと接したかったのでしょう．私，忘れもしない記憶があります．忙しかったから滅多に家族で遊びに行くなんてなかったんですけどね．一度，家族で有馬温泉に行ったんですよ．そこで私たちと父との間ではあまり会話がはずまないのです．うちの父も子どもと上手になんてしゃべれないしね．ところが，お隣の席にいたご家族がね，すごく楽しそうに父親も子どもも話をしていました．それを見た父親が「いいなあ．あんな家族」とボソッとつぶやいたのです．でも自分にはそんなふうにできない．それを表現した時の父親の表情を今もはっきりと覚えています．

対話者Ｄ：家族の中での権力の構造みたいなところをイメージしながらお話を伺っていたのですが，お父様のお話をもうちょっと伺いたいなと思っていました．

渡部：父は，先ほどの話に出たように，商売をする人間としてはとても頑張ってそれなりの成功はした人だった，でも，家族の一員としてどうふるまえばよいのかわからなかったという気がします．パワーの面で言えば，発言権はありました．例えば私の進路に関しても，途中経過はほとんど関心なく，見ていないにもかかわらず，急に「医学部に入れ」などと言い出し，私立文系に所属していた私が急転直下，やむなく理系の受験勉強をするという経験もしました．昔の人間で自分は商売をしてつらかった⇒商売はさせたくない，⇒昔の人間なので，女性が普通の仕事でやっていけるとは思っていなかった，⇒女性は手に職が必要だと考える⇒やはり，昔人間で，尊敬できる職は医者か弁護士だと考えている⇒娘にそれを託してみよう，といったような論法だったのだと思います．父親は私の高校の成績もよくわかっていなかったはずです．小学校時代の私は優等生だったので，ずっとその記憶をもって私に無理な進路を要求したのではないかと思います．結局は，私の体が拒否反応を起こし，蕁麻疹が出て，無理な勉強をさせるな，というドクターストップでやめることができたのですが．

対話者Ａ：お姉さんの存在が大きかったように思えるのですが，いかがですか．

渡部：私には当たり前になりすぎていて，今日，きちんと話せていなかったことを聞いてくださり，ありがとうございます．そうです．うちの親は忙しくて子育てに関与できないことが多かったのですが，私は末っ子ということで上の姉たちが実際には私の父親や母親の代わりだったと感じています．それなりに威張られたりもしたので，喧嘩もしましたが，姉たちには感謝でいっぱいで

す．一番上の姉は父親，すぐ上の姉は母親の代わりだったと思います．家族の元を離れても私の人生では，姉のような役割を果たしてくれる人たちが現れてくれて，救われたことも多いです．下に妹も弟もいないので，姉の気持ちを味わいたくて，年下の人と友人になったら，「お姉さん風」をふかします．

そうそう，最後に父親の思い出を話して第一回目を終えます．「ちょっと良い話」です．父親は私が20歳の時に亡くなりました．子どもには関心がなかった，と思い続けていたのですが，机の中の整理をしていたら，私が小学校6年生の時に地方新聞に載った記事を切り抜いていてくれたんです．当時「学校交換会」という行事があって，都会のど真ん中で自然を知らない私たちが，郊外の姉妹校を訪問し，自然に触れる会だったのですね．その時，私は児童会の会長だったんです．当時，児童会会長は常に男子だったんですが，私は初代女子児童会長になりました．そのせいもあって，訪問先の小学校でみんなの前で挨拶したのが，小さな新聞記事に取り上げられたのです．古い切り抜きを見つけた時，とても嬉しかったのを思い出しました．ちょっと良い話です．

2021年11月21日実施：第2回インタビュー
話し手：渡部律子先生，聞き手：岩永，阿川，太田，大輪，辻村

では，始めさせていただきます．皆さんよろしくお願いします．

前回は私の大学時代，そして卒業の時に，ちょうどオイルショックで公務員試験全部に落ちて，就職せずに大学院に行ったというところまでお話ししたと思います．今日は2つの時期に分けて，アメリカ生活のことを中心に喋らせていただきますが，一応留学前っていうのも喋っておかないと，なぜ留学したのか，ということを疑問に思われる，と思いましたので，アメリカ留学前からアメリカの大学院時代をお話します．これは，大学を卒業した1976年から博士論文を書き終える1990年までです．結構ありますね．14年間です．

1．アメリカ留学まで：1976年（うち2年間は日本の大学院）～1982年夏

【非常勤の仕事を掛け持ちして相談業務に従事】

関西学院大学大学院の修士課程に行ったことは既にお伝えしましたが，大学院では実習に毎週行かせてもらえました．実習先では，私がやりたかった，子どもの遊戯療法を極めることができる，優れた先生方が在籍しておられ，のちには京都大学の河合隼雄先生や岡田康信先生が研修にも来てくださった「教育研究所」で遊戯療法を中心に実習しました．そこは教育研究所なので，学業問題や心理的問題を抱えている親子が相談にきます．大学院に入ったのは76年だったのですが，1年目にほとんどもう必要単位は終えていました．私は経済的にもかなり無理をして大学院に行っていたので，仕事をする必要がありました．幸運にも，2年目に大学の学生相談室で，嘱託相談員としての仕事を始める事が出来ました．ここでのクライエントは大学生，青年期の人々です．

実習先であった教育研究所でも，2年間の実習が終わった段階で非常勤採用してもらえました．ここでは私は子どもの遊戯療法を担当し，先輩の先生は親御さんの相談担当というペアでの仕事をしました．仕事自体は，ソーシャルワークと言うより心理療法でした．職業アイデンティティも怪しい時がありました．

この間，実習記録および自分の実践記録を書くことは毎日真面目にやっていました．週一回1時間スーパービジョンを受けることができました．のちにほかの教育研究所でも非常勤で相談員をし，さらに家庭教師をして，収入を得ていました．私が留学前にやっていたのは，まさにミクロ相談業務で，社会福祉制度・サービスとの連携とかも

ほとんどありませんでした．アメリカに行ってからは，ミクロ相談業務であっても，制度・サービスとの関わりを経験しました．

【悩みながら相談業務を継続・様々な場所に学びの機会を求める】

ここで自分は，高度な知識やスキルもないまま相談を受けていたんですね．当時主流だったアプローチっていうのは，ロジャースの来談者中心療法だったんです．つまり，クライエントに寄り添い続ける，クライエントを理解して，クライエントには自分で変化して行く力（ちから）があるということを基盤にしていました．それを徹底してやっていましたが，当時の私はアセスメントとかゴール設定などは全く考えないで，相談業務をやっていました．ひたすらクライエントの思いを理解することに専念していました．実践記録もひたすら書きました．ここで実習中も，先ほどお話したように非常勤職の職場でも個人スーパービジョンを受けたんですが，その時に私が感じたことは自分の言葉が足りない，ということでした．大学の先生からもスーパービジョンをしていただいたんですが，自分の実践内容をなかなか上手に説明できないことに気づきました．そこで，大学の先生とでも，ちゃんと対等に話せる実践家になりたいっていう思いが，だんだん自分の中で，大きくなってきました．クライエントに徹底して寄り添うことの大切さを学びつつ，自分に足りないものを実感しました．もちろん，実践の中でもクライエントが良い方向に変化をしていってくれるという貴重な経験を共有させてもらいました．そういうことを事例研究として，当時仕事をしていた教育研究所の紀要に書いたのですが，自分の中にアセスメント力がないから，どんな視点から自分のやった実践を振り返ればいいかがわからなかった，というのが本音です．

実践に関しては，自分がやっている事が間違っていても，なかなか一人では気付けない不全感，不安感を常に抱えていて悩んでいました．実際に誤った支援をしかけたこともありました．当時，私は本当に精神衛生に関する知識がなく仕事をしていましたので，誰にでも「受容」を基本にしたアプローチでよいと考え，面接を進めていった結果，妄想を悪化させてしまうという失敗をしました．後々私が学んだことは，ラベルを貼るためではなく，その人に最適なアプローチをするために，きちんとアセスメントをすること，可能性は絶対に見つけなければいけないけれども，人には限界もあることを適切に見積もるということでした．現実を否定して仕事をしてはいけないということを，この時の経験が教えてくれたのだなと思います．

ずっと悩みながら仕事をしていたので，自分で学びの場を求め，あちこち放浪致しました．どんなところに行ったかというと，箱庭療法研究会，これは京都まで行きました．それから，阪大の辻先生が主宰していたロールシャッハ研究会．自分にアセスメント力がない，特に精神科領域のことがわからないので，それを補いたいと思って行きました．私にとってはすごく難しかったんですけど，ロールシャッハ研究会に行って中級まで何とか終了しました．それからいろんな理論を知りたいと思ったので，関西カウンセリングセンターにも行きました．そこは当時，関西だけではなくて，中国地方にある大学からもかなり有名な先生たちが講師として来てくださって，認知療法であるとか，箱庭療法，ゲシュタルトセラピーなど，様々な異なるアプローチを教えてくださいました．それぞれ短い時間でしたが，実践の経験も交えて，著名な先生方が教えてくださいました．ここで河合隼雄先生と私の大学院時代の恩師の武田建先生が公開スーパービジョンを，年に1回か2回だったと思いますが，やっていらして，修了生のケースを公開でスーパービジョンしてくれるというの

がありました．そこで私自身が2度ほどスーパービジョンしていただく機会がありました．その時に“スーパービジョンの持つ深い意味”の一端を理解しました．何かと言うとね，スーパービジョンのその場では，バイザーの言ってくれている言葉の意味がすぐにはわからないのです．最初は聞きながら私の頭の中に「？マーク」がいっぱい出る．でも，その「？マーク」のことをずっと考え続けていると，何ヶ月か経ってから「ああいうことだったんだ」とひらめくのです．ですから，今よく，皆さん勘違いして「スーパービジョンを受けたら，すぐに何かできるようになる」と思っていらっしゃったりするんですが，実はスーパービジョンは教育と一緒で，“その効果というのはじわりじわり出てくる”っていうことに気付く事が出来ました．それから自己覚知のために，「エンカウンター・グループ」と呼ばれるグループワークにも2泊3日で参加したこともあります．その間，ずっと自分を見つめ続けることはつらかったのですが，得るものはありました．

いろんなことをやったことは回り道だったかなと思うのですが，でも，“徹底して利用者の理解をする”っていうことは，この当時しっかりと身に付けられたなと思います．でも，それだけではいけない．だから“ちゃんとアセスメントをして仕事をする”．「アセスメントをするからといって，利用者に寄り添わないのではない」ということを言えるのは，こういう経験が元になっているかな，と思います．

【仕事をやめようと悩んだ結果「もう一度勉強し直そう」と考え，留学準備を始める】

でも，この辺り，私はずいぶん悩んでいたので，仕事を辞めようかと考え始めます．やめようかと考えたときに，私しつこい性格なので，「せめて何かをちゃんと知らなくちゃ．何か分かりたい．分かってからやっぱり私に向いてなかったって決めてから辞めたい」と思いました．実践に役立つ知識やスキル，いろんなところに勉強に行っていろんな所から吸収してはいたんですが，今ひとつ系統を立てて，自分の中に染み込んでいないというのがよくわかりました．

私が決めたのは，アメリカの大学院への留学でした．留学は通常大変なことなんですが，恩師の武田建先生が戦後まもなく留学を経験して博士号まで取っていらっしゃったんです．そのおかげもあって，母校である関西学院大学の先輩たちが，アメリカ留学することに対して，割とこう平気で，普通にやってらっしゃったんですね．環境って大事だなと思います．元々アメリカなんて全く関係のないところで，うちの家族にそんな人は誰もいないし，留学した人もいなかったけれども，私にとって，アメリカに行くことがそれほど不可能なことに見えなかった．武田先生も，すごく苦労してソーシャルワークの理論を身に着けていらっしゃったんです．だから，留学が不思議なことではない，可能なことだっていう環境があったので，それなら私もちょっと頑張ってみようかと思いました．

【英語力獲得に苦戦する】

でも私の英語力，ボロボロだったんですね．一番最初にTOEFLを受験した時，400点台でした．本当は，最低500点必要です．実際，550点っていうのがミシガン大学の最低ラインでした．これはまずいぞと思い，大学院の2年目から英語学校に行きました．一応大学院に行っていたので，「基礎クラスから始めるのは恥ずかしい」と思っていて（笑），面接受けた時，背伸びをして，できるふりをしました．それで，最初は初級クラスに行かせてあげるって言われたんですが，その後「ディレクター面接」というのがありました．さすが，ディレクター，なんです．今になってみれば，「ありがとう，ディレクターさん」です．彼が，

「渡部さん，申し訳ないけど，貴方の英語力は基礎の基礎です」って見破られてしまいました．そこで，基礎クラス配属になって，高校生と一緒に暗記の連続をいたしました．そんな訳ですから，皆さんに声を大にして言いたいと思います，「25歳を過ぎてからでも英語はできるようになる．発音の上達を除いて（笑）」．英語学校と並行してラジオの基礎英語，ラジオの英会話を聴きました．ここが私の，生まれて初めてやった「偉いこと」でした．その時まで，なにかお稽古事などを始めても，すぐやめていたんですが，英語学習に関しては自分に厳しいルールを課しました．「ラジオ英会話の録音は絶対しないでリアルタイムで聴く」ということです．このラジオ番組は，当時一日に3回再放送も含めてあったので，どれかは絶対聴けるのです．朝6時半から聞けなかったら昼に聞く，昼に聞けなかったら夜に聴く．On time で聴くことを日課にしました．そのおかげで，ほとんど休まず全部聴き通しました．

この勉強法は，通訳ガイドの試験に合格した，高校時代の友達から学んだ方式です．彼女と一緒に大学時代旅行に行ったんですが，彼女はトランジスタラジオ（当時これはかなり大きかった）持ってきたんです．それで，ある時間になると「ごめん，ちょっと勉強するから」と言って，15分間どこか静かなところへ消えるんです．「何してたの？」って言ったら，「いや，ラジオ英会話聞いてたの」と．「すごい，私は逆立ちしてもできないわ」と思っていたのですが，私もできました．やればできるものですね．

TOEFL の予備校にも行きました．英語論文の書き方は，ここで初めて学びました．初めて論文の書き方にノウハウがあるっていうのを教えてもらいました．こんな授業あるんだと思って，びっくりしたのを覚えています．通信教育で英語の翻訳講座も受け始めます．ずいぶんと TOEFL にお金をつぎ込み，やっとミシガン大学の必要最低条件の550点を超えました．

英語は目標達成．でも，次は「お金がない」です．貯金はしてたんですが，全然足りません．で，奨学金もらいたいなって考えました．私って途方もないこと考えるんですね．奨学金を得る条件と照し合わせると，もちろんそんなに成績良くなかったし，英語力も無いのでもちろんフルブライトはダメで，ハワイ大学の奨学金制度もダメ．でも CWAJ（College Women's Association of Japan）の奨学金を得ることが出来ました．戦後の考え方かもしれないですが，「将来，職業婦人になる人たちが付く業種を勉強する女性を留学させよう」をモットーに奨学金をくださる団体でした．そこで奨学金をいただけました．でも1ドルが290円となり，急に上がった際に日本円で奨学金をもらったので，その後の経済的な苦労が始まります．後に円高の時代が来て，1ドル100円になったりもしたのですが，その恩恵は受けられませんでした．

2. アメリカ留学学生時代：1990年博士号取得まで

【毎日泣き暮らした修士課程】

ここからが留学生活です．1982年の夏に留学します．1983年の12月まで，ミシガン大学のスクール・オブ・ソーシャルワークです．当時ミシガン大学が試み始めたカリキュラム「夏休みはなく，夏にも週4日実習に行って，週1日朝から晩まで授業を受けたら1年半で卒業」というコースに入りました．1年半であれば，生活費が少し安く済むかなと思ったんです．

英語の授業についていくのが，すごく難しくってノートも取れませんでした．友達が時々「ノート見せて」って言うんですが，笑って「いいの？」ってノートを開いて見せたら「いい，いらない」って言うのでした．もちろんノートは日本語と英語のまぜこぜでした．授業中手紙を書いて

いても日本語なので，誰にも気づかれない，という感じです．毎週大量に課せられる授業のリーディング課題にも全然間に合わない，レポートも書けないといった状況だったんです．

【自分のおかれている状況を正直に他人に話して助けを求めることを学ぶ】

ここで新たなコーピング法を学びました．「この時の大変さを乗り越えたスキルは何なんです？」と聞かれれば，「ちゃんと自分の状況を先生に伝える」ということになります．アメリカの大学院の先生って，本当にその辺融通が利いて，授業始まってすぐにシラバスに全部宿題も提示してくれるんです．でも，おおよその事が分かっても，細かいことは教えてくれない．日本にいる時なら恥ずかしくてできなかったことをせざるを得ない状況に置かれます．つまり，私は先生の部屋を訪問し，「先生，私は留学生です．英語１ページ読むのに１時間かかります．今から準備を始めないと，みんなと同じようにレポートは書けません．必ず頑張りますので，先に宿題となるレポートのテーマを教えてください」とお願いしました．するとほとんどの先生が宿題をより詳しく教えてくれました．ですから，「みんなが２週間で書くものを，私は3ヶ月かけて書く」ことを決めました．すると，それなりの内容のレポートが書けて，よい成績も取れることが分かってきました．それからもう１つは「英語力は無くても真面目に本を読んでまとめる．書くという作業も，2週間なのか3ヶ月もかけて仕上げるのかでは，内容が違ってくる」っていうのも，この時わかりました．

英語の授業は全部解らなくても，一心不乱に聴く．そしたら本当に頭を使い続けます．そして，どこが大切で，どこがそれほど大切でないのか，わかるようになりました．内容がより深く頭の中に入ってきます．だから，そうして聴いた授業の内容は今でもしっかりと覚えてます．私は英語ができないので，耳をダンボのようにして授業を聞いていますが，ネイティブのクラスメートは，英語がよくわかるので，時には聞き流しできます．私は全身を耳にしているような感じで授業を聞いているから，クラスメートが「今，先生何言った？」って聞いてきた時にも，私の内容要約は結構役立ったようです．

でも，その一方で，言葉が不自由なために，本当に「赤ん坊」に戻ったような気がして悲しくて仕方がない思いもしました．大学から寮に帰るために，スクールバスに乗ると，座ったとたん涙がこぼれる日が数ヶ月続きました．周囲の人は不思議に思ったでしょうね．

【修士課程の学習内容―苦しいけれど授業内容は新鮮でワクワク】

修士課程では，当時アメリカのジェネラリスト・ソーシャルワーク，まあその走りというか，いろんな理論を統合して何でも使えるようになるソーシャルワーカーというのが示されていました．１つの理論だけを使うのではない．複数の理論を適切に使って，利用者への最善の支援をする，ということで，精神分析理論，認知行動理論，グループワーク，家族システム療法などを学び，それらを自分の頭の中でまとめてどのような統合をしていけるか考えるという課題も出ました．副専攻では経営管理（administration）を同時に学びました．勉強は，苦しかったんですが，全ての授業でワクワクしてたんです．なぜかというと，「私がずっと悩んでいたことって，こういう言葉で表現できるんだ」とか，「こういう見方をしたら，あの問題はこういう風に考えられるんだ」っていっぱい見えたんです．だから，授業中は頭がフル回転していました．英語を理解しようする努力と，日本でやってきた実践での迷いや悩みを授業内容の関連付けをしようとする努力がミックス

されて，まさに，授業中「独り問答」していました．実践と理論にどう橋を架けられるか？をずっと考えていました．できないこともよくあったんですが，私は日本の授業では先生に聞きに行くっていうことができなかったんですが，この頃は「もう聞かざるを得ない」という気持ちで，いろんな疑問を聞きに行きました．そしたら，先生は，分かれば何でも教えてくれたので，本当にその時たくさんのことを吸収できたと思っています．当時，ミシガン大学は実践経験が2年なかったら，大学院には入れなかったと記憶しています．学生みんなに実践経験があるので，常に実践と理論の行き来をすることは授業の中でも大事なことでした．

【甥の発病―小児がんの家族に関心を抱く】

ここで個人的な出来事として，私の甥が小児癌で発病したため，一時帰国します．このときに子どもの癌患者と家族，特に兄弟姉妹への支援のあり方に関心を持ちました．自分では論文を出していないのですが，調べ物をして自分の中でまとめをしたことがあります．また，このときの経験をもとに姪が絵本を書いたので，その絵本の前書きをしています．今もこのテーマには個人的な関心を持ち続けています．

【留学生仲間からの学び】

留学生仲間との出会いでも学びは多かったです．韓国の留学生は，のちに友人になったんですが，会ってすぐに「日本嫌いだ」って言われたんです．挨拶もなしに，そんな失礼なことある？って思いました．続けて「でも日本人は嫌いじゃないです」と言われ，社会体制と国民との区別ができた上で正直な思いをぶつけられたんだなって思いました．彼の話を聞いていると，韓国での日本教育，それから植民地政策に関して，どんな思いを持っているか初めて学びました．それからケニアの留学生がいたんですが，みんなで貧困の話をしている時，彼がさっと手をあげて，「アメリカの貧困なんて本当の貧困じゃない．甘いよ」って言いました．その後は，誰も何も言えなくなったのを覚えています．南アフリカの留学生は，「勉強して帰っても，やっぱり差別される」って悲しそうに言っていました．一方で，「クリスマスに家に帰ってきたの」って，その時の夕飯の写真を見せてくれたら，すごく立派なテーブルで，給仕している人が白手袋しているんですね．「まあ，どこのレストラン行ったの？」って聞いたら「私の家」と少し恥ずかしそうに答えました．南米から来たすごいお金持ちでした．色々な人，様々な社会，文化，社会階層に触れることができました[2]．

1　投稿規定によって，現役院生の阿川氏・大輪氏は著者に名前を連ねることができないが，実際には共著者である．ここに記して感謝申し上げるとともにお詫びする．

2　紙幅の関係で，続きは，「渡部律子先生オーラルヒストリー：ソーシャルワーク研究と教育の道のり：留学・博士号取得」をご覧いただきたい．